

アムスルだより

No. 2 1993年 7月10日

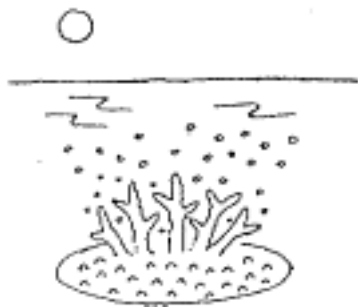
Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875



サンゴの産卵

前回の「アムスルだより創刊号」で予想したように、ミドリイシサンゴの産卵は、6月は満月(6月4日)の夜とその翌晩に起こりました。研究所の水槽では満月の3日前からぼつぼつと産卵が始まっていたのですが、海の中では例年と同様、ほとんどのサンゴが同時に産卵し、粉雪が舞い上がるような光景を見せてくれました。

ここ数年、テレビや新聞でサンゴの産卵の映像が紹介されることが多いです。慶良間列島は、サンゴの種類が豊富で世界でも指折りのサンゴ礁景観を誇ることから、毎年のように撮影隊が訪れています。私達もこの恵まれた環境を生かして5年前からサンゴの産卵調査を始めました。今回はサンゴの産卵と繁殖生態についてご紹介したいと思います。

サンゴは産卵することからも分かるように、れっきとした動物です。さまざまな形をしたサンゴは、実際はたく

さんのサンゴ虫(ポリプ)からなる群体なのです。大部分のサンゴは雌雄同体で、1つのポリプの中に卵と精子の両方をつくり、これらがいっしょに入ったカプセルを生み出します。しかし1つのサンゴ群体の卵と精子では何故か受精できません。ですから、うまく受精させて子孫を残すためには、同じ種類のいくつかのサンゴが同時に産卵して、卵と精子が混ざり合わなければならないのです。

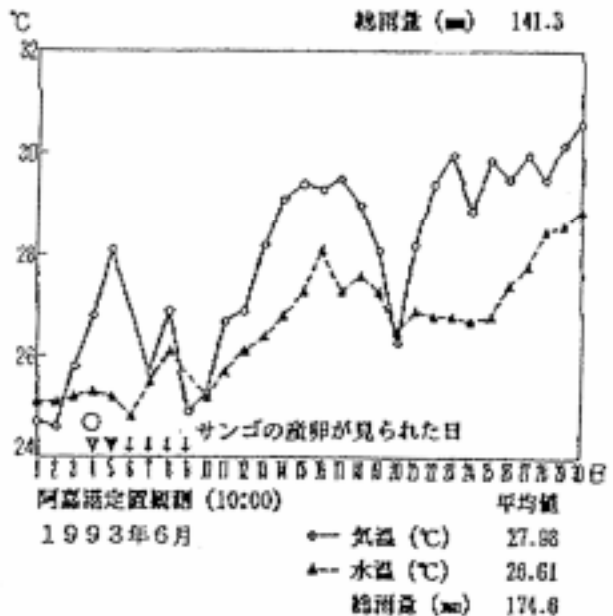
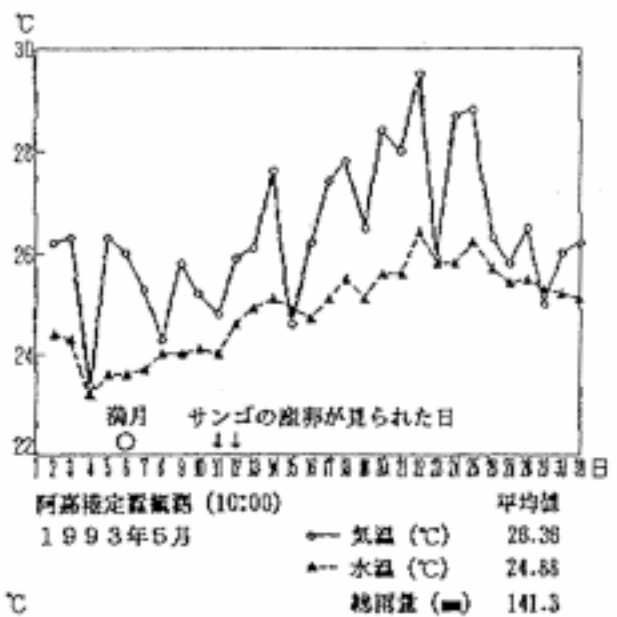
サンゴの産卵は5月から8月(種類によって違う)にかけての満月の前後に見られます。最も多くみられる時間帯は夜9時半から11時の間です。仲間同士が同時に産卵するために、彼らは何らかの合図を使っているはずですが。この合図が分かれば産卵日が正確に予測できるようになるのですが...

産卵のあった翌日には港の角や海岸付近に異臭のするピンク色の浮遊物が見られますね。それは風や波によって吹き集められたサンゴの卵です。サンゴの幼生は水面近くを浮遊しながら分散し、1週間ほどで岩や死んだサンゴの上に着床し1つのポリプとなり、分裂を繰り返しながら群体として成長していきます。

ひとくちにサンゴといってもその種類は多く、阿嘉島周辺でも約300種が存在すると思われます。私達が産卵を観察できたサンゴはその内の90種に過ぎません。6月にはミドリイシサンゴの仲間がたくさん産卵しましたが、7月には先月とは違った種類の産卵が少しだけ観察されました。そして8月2日の満月から数日後には、キクメイシサンゴの仲間を中心にまたたくさんのサンゴが産卵するでしょう。サンゴの産卵に関する情報、写真などがありましたらぜひ研究所にお知らせ下さい。また、詳しい情報や種類が知りたい方も遠慮なくお尋ね下さい。私達はこれからも色々な調査を通して美しい慶良間のサンゴ礁を見守っていきたく思います。

阿嘉島の海より -ウミガメの産卵-

梅雨明けと同時に気温と水温がどんどん上昇し、本格的な夏に突入しました。今の時期、ウミガメが慶良間列島の砂浜に産卵のために上陸します。アカウミガメは5～6月に、アオウミガメは7～8月に多く産卵します。砂中の温度によって違いますが、卵はおよそ2ヶ月で孵化します。去年は早くも7月20日に、屋嘉比島でアオウミガメの赤ちゃんが卵からかえっているところを見つけました。その時、砂から出られずに残っていた子ガメを研究所に持ち帰り、水槽で飼育しています。ご覧になった方もいると思いますが、今ではかなり大きくなり、やがて1歳



の誕生日を迎えます。そこで、そろそろ標識を付けて、海へ放してあげようと思います。うまく自然の海になじんでくれるといいのですが...

今、世界的にウミガメ類が減ってきています。慶良間列島は数少ない産卵場の一つです。産卵を見つけたら、静かに見守ってあげましょう。9月10日発行予定の次号では、ウミガメについてさらに詳しくお話しします。